

TPP参加は日本農業破滅への道、国に反対働きかけを

日本共産党議員団が市長あてて要請書を提出

外国からの輸入品にかける関税を原則10%撤廃し貿易自由化を行うTPP(環太平洋戦略的経済連携協定)参加が、13日に開催されるAPEC首脳会議を前にして大問題となっています。

日本共産党上越市議会議員団は10日、村山市長に対して、TPPへの不参加を国に求めるとともに、米価暴落、一等米比率低下対策を求める緊急要請書を提出しました。

TPPに参加すれば日本農業は、農水省の試算で米90%減、小麦99%減となるなど大打撃を受けます。農業都市としてコメを中心とした多角的な地域農業の振興をめざしている当市にとっても深刻な打撃となること必至です。そして、市内農業関連産業はじめ地域経済も深刻な事態に陥ります。

要請書では、今夏の猛暑による稲作被害の原因究明と経営支援についても合わせて求めました。要請書を受け取った川上農林水産部長は、

私たちの要請に理解を示し、市長にしっかりと伝えることを約束しました。要請項目は以下の通りです。

- 一、農業と地域経済に大打撃をあたえるTPP交渉への不参加を国に求めること。
- 二、米価暴落・一等米比率低下により資金繰りが困難となっている農家を支援する県独自の無利子緊急融資にふみだすよう、県に働きかけること。
- 三、猛暑による農畜産物被害の実態を精査し、自然災害と位置づけ、対策を強化すること。
- 四、一等米比率低下の原因究明を緊急におこない、県産コシヒカリの品質向上・品種改良をすすめられるよう、県農業総合研究所の機能の抜本強化、農業改良普及の体制強化を県に求めること。

総合事務所31人はぎりぎりの体制
吉川区内で初めてのキャッチボールトーク(市長と市民の対話集会)が4日、吉川コミュニティプラザで行われました。吉川区内在住の市民や市役所職員など約80人が集まりました。いくつものキャッチボールを紹介します。

総合事務所31人はぎりぎりの体制

吉川区内で初めてのキャッチボールトーク(市長と市民の対話集会)が4日、吉川コミュニティプラザで行われました。吉川区内在住の市民や市役所職員など約80人が集まりました。いくつものキャッチボールを紹介します。

(写真右下)は、「新しい若い人材を確保するには早い方がいい。最近就農してくる若い人は、つなぎで農業生産法人などに勤める人しかいない。農業という仕事を意識した説明会を



やってほしい。農業をやる人をどうやって増やしていくかという発想が必要だ」とのべました。大滝さんの提言に市長は、「非常に参考になった。ヒントをもらえた」と答えていました。

下小沢で喫茶店を営む大滝幸子さん。越後田舎体験

の受け入れについて提案を行い、注目されました。大滝さんは、「田舎体験をしに来た子どもたちはみんないい子だが、受入れの時期に問題がある。稲刈りなどいろんなことができる時期を提案していただきたい」「せっかくならうてもらっても、吉川のことを知ってもらうネタがない。天明さんのブルーベリー、山岸さんのトマトなどいいものがあるのにどこへ行ったらいいかわからない。簡単なものでいいから観光マップを作成してもらえないか」と訴えました。

「まちづくり吉川」の田中臣一郎さんは、越後よしかわ酒まつりなど吉川区内のイベントに対する補助を減らさないこと、総合事務所職員を減員しないことを求めました。このうち、総合事務所職員に関して市長は、「いまの段階で31人体制はギリギリの体制だと思っている。事務所の職員は一人で4課、5課の仕事をしているが、どういう仕事のあり方がいいのか検討中」とのべました。この発言は13区総合事務所

の職員体制にかかわるもので重いものです。このほか、川谷地区を走る地域バスの存続と改善(ワゴン車)の検討が約束されました。(他にも載せたい発言がいくつもありませんでしたが紙面の制約で、私のブログに掲載しました)



■環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)の農業への影響 (農林水産省試算)

農業生産	4.1兆円減
食料自給率	40%→14%へ低下
農業の多面的機能	3.7兆円喪失
実質GDP	7.9兆円減
雇用	340万人減

(即時関税撤廃を前提)

先日ある集会で七〇代のMさんがやっと思ひ出した横文字はフィールドスタディでした。日本語で言う「現地学習」という意味です。この言葉を聞いて、私は九年前にわが家の牛舎へやってきた子どもたちのことを思い出しました。

現地学習というのは、学校から離れ、農業生産の現場などを訪ねて学ぶことです。わが家の牛舎へやってきたのは旧源小学校の児童一二人。もちろん担任の先生も一緒です。それと校長の高橋先生も一緒だったように記憶しています。梅雨入り前の六月四日でした。

子どもたちが牛舎にやってくることを事前に校長先生から教えてもらっていましたので、わくわくして待ちました。教師の道を進みたいと思つた時期もあつた私は、農業をやる決断をしてからも、一度は子どもたちを前にして授業みたいなものをやってみたいと思つていたので。

当日、マイクロバスでやってきた子どもたちは好奇心が強く、元気いっぱい。私の説明を聴く目は輝いて見えました。熱を出していた牛の体温を測るために肛門の中に体温計を入れると、そばにいた子どもたちは不思議そうな顔をしています。パーンクリナーで牛の糞を片付ける作業を見た時も興味津津。子どもたちは、この機械を「うんち用ベルトコンベアー」と名付けました。恐る恐る牛の体に触ったり、エサを手にとつて見つめる子どももいました。

この日、私は、子どもたちに楽しく学習してもらおうと「秘策」を考えていました。それはクイズです。クイズを次々と出して「楽しい授業」にしたかったのです。これが大当たりでした。

牛舎前の広場に子どもたちを集めて、「はい、みんな、牛舎の中で牛をよく観察してくれたことと思います。それでは、おじさんの方からクイズを出します。わかるかな」。「一問目。おじさんの牛舎には現在、乳を搾っている牛が一四頭います。このうち、オスは何頭、メスは何頭いたでしょうか」。ちよつと意地悪な質問だったのですが、みんな真剣な表情をして考えてくれました。正解はいうまでもなく、全部メス。「では、次の質問です。みなさんは顔や声などで誰かを区別していますね。牛たちの場合は何で区別しているでしょうか」。「最後の質問。牛は何に強く、なにに弱いか。わかる人、手をあげてください」答を聴いて、驚きの声を上げる子どもがいれば、「なるほど」という顔をしている子どももいました。とても楽しそうでした。

子どもたちは後日、この日の学習の成果を黄色と水色の大洋紙にまとめてくれました。「モーモー探検隊」と書かれた黄色の大洋紙には、学習したことや感想などがしっかりと文字で書かれています。「エサをたくさんあげると赤ちゃんが（お母さん牛のお腹の中で）大きくなって、おしりのあなからでてこなくなる」「角（つ）がはえていたからオスカナあって思つていたけど、メスだったのでびっくりしました」子どもたちのまとめを読んでもうれしくなつたのはいうまでもありません。

牛舎訪問の九か月後、今度は私が学校に出かけ、この子どもたちを前に話をさせてもらいました。確か卒業式の前だったと思ひます。私にとつては学校での初めての「授業」でした。現地学習ですっかり顔なじみになつていたので、息もぴったり。「私たちの生まれ育つたふるさと」の魅力を語り、探る一時間、子どもたちと一緒に学ぶ喜びを味わうことができました。「モーモー探検隊」のみなさん、元気ですか。

笑いあい、拍手あい。東京吉川会盛会

東京吉川会の総会と懇親会が7日、東京都内で行われました。東京、千葉など関東各地から約100人が集まり、新潟からは14人が参加しました。この他、いくつかの郷人会の会長さんなどが来賓として参加されましたので、大勢でした。

平山勇会長の挨拶の後、吉川区などからの参加者を代表して、吉川区総合事務所長の八木辰正さんが吉川区の最近の動きを紹介しました。昨年12月から今年2月にかけて降った雪のこと、県立吉川高等特別支援学校の開校準備が進んでいることなどの話を参加者は興味深く聴いていました。

この会の魅力は、何といてもふるさと吉川出身の人たちと会って話ができること。ここ6年ほど連続して参加していることもあって、かなりの人たちと顔見知りになりました。そういう人たちからは、政治の話も結構出ます。この日は、次回の市議選のことや読売新聞で連載が始まった不破哲三の「時代の証言者」のことが話題に上りました。

各人が胸に付けている名札を見て話しかけると、兄弟の人や実家のみなさんと私が交流のあることがわかって、どんどん話が進みます。この日も原之町出身の方や伯母ヶ沢出身の方などと初めて話をしました。

会では旧源中学校時代の同級生とも再会することができました。再会したのは、いずれも女性ばかり。一緒に記念写真も撮りました。すでに還暦を過ぎているにもかかわらず、私以外はみんな若々しいので驚きました。

懇親会ではマジックや踊りなどもあり、会は盛り上がりました。写真上はバリダンス、私は最前列にいたので、体の動きなどがよく見えます。しなやかで、とってもセクシーでした。

